

学ぶこと、生きること

－ 講演要旨 －

講師 田頭 穂積

私が心理学を学び始めたのは1970年代ですから、今から20数年前になります。当時、「学習とは何か」、「学習はどのようにして成立するのか」ということは、動物の行動を通して客観的に研究するものであるという考え方が主流でした。私も「学習」の研究領域に関心があり恩師との出会いもありましたので、当然のこのようにネズミを用いて研究していました。学習の現象を認知的に解釈することは、ネズミだけでなく人間においても、まだまだ御法度的な感がありました。当時は、心理学のテキストを見ても「学習」という用語だけが使われており、「学ぶこと」とか「学び」ということばは、ほとんど見受けられません。しかし、子どもたちの学習意欲の喪失、情報化社会、高齢化社会に伴う生涯学習の必要性などから、最近になって「学ぶということとは」という本質的な問いかけや見直しが心理学の分野でも起こってきました。これには、日常生活における学習の研究など心理学の進歩も見逃してはなりません。

みなさんも子どもの頃を思い出してみてください。親に「どうして、勉強しろ勉強しろと言うの」とか、「どうして勉強しなくちゃいけないの」という問いを一度ならず投げかけたことがあるのではないのでしょうか。しかし、期待に反して、「今にわかるさ」、「ほかの子もやってるんだから」、「そんなこと言っているとテストでいい点が取れませんよ」という、お決まりの答えが返ってきたのでは。「学ぶ」とは、いったいどういうことを意味するのでしょうか。最初に、「学ぶこと」は日常生活の中でどのように捕らえられているのか、そのあたりから考えてみることにしましょう。

小学生2年の息子に「学習」ということばを知っているかと聞きますと、「勉強のことじゃろ」と得意げに回答。次に「勉強とは」と尋ねますと、「知識をつけたり、なおすことよね。ちゃんとした知識をつけるためにするんよ」と答えました。そこで、「学習」と「勉強」はどう違うのかとさらに突っ込みますと、「学習は学んで習うこと」で、「勉強は、書くこと。学校でやる」などと彼なりに定義しました。「勉強は家ではやらないのか」と聞きますと、「宿題はするよ」と言います。そして、彼によると「勉強と学習はほとんど同じ」であり、学校では、先生から「勉強をしましょう」と言われるそうです。中学生に「勉強について」という作文を書かせると、成績のよい生徒でも勉強は嫌いという意見が圧倒的に多いそうです。「何のために勉強しているのか」、「できることなら勉強はしたくない」といったやる気のなさがみられ、学んだことを広げたり深めたり、楽しんで何かを追求していく姿勢が希薄になっているそうです。このように、学校での学習は、テストや賞罰などによって外側から強制されているので、いやいや学習させられていると感じている子ども

が多いのではないのでしょうか。彼らにとって、「学習」には、「勉強」のイメージが影を落としているようです。「学習」は本来楽しいはずのものであるのに、「強いて勉める」暗いイメージに彩られているようです。人生の初期に学ぶ楽しみを奪われることによって、学ぶことは苦行に近いというイメージを後々まで引きずっているのです。ちなみに、大学生76名に「学習」から最初に連想したことを挙げてもらうと、1位が「勉強」で50%を占めていました。さらに各人が連想した総てのことばについても調べてみると、全人数の71%に「勉強」の語が出てくるのです。面白いことに、中国語の「勉強」には、「学ぶこと」の意味はなく、「無理に強制する」とか「いやいや行う」の意味があるそうです。

「学ぶこと」とはいったいどういうことを意味するのでしょうか。学校における「学び」は、通常、「勉強」という言葉で表現され、「学習」という言葉では表現されていません。また、ほとんど意識されてもいません。「学ぶ」という行為を名詞化した「学び」は、「学習」と同じような意味をもちますが、ニュアンスに若干の違いがあります。「学ぶ」には、「いやいや学ぶ」という言い方があることから、「学び」は、本来、学び手自らが主体的に学ぼうという意志をもって営まれる活動をさすものと思われまます。一方、学習という場合は、必ずしも学び手が自ら学ぼうという意図があったかどうかということよりも、行動がどのように変化するかを観察することに主眼がおかれているように思われまます。「学習」は、心理学では、「経験や練習の結果生じる比較的永続的な行動の変化、およびその過程」と定義されています。例えば自転車乗りのように、今までできなかったことが、経験や練習によって新たにできるようになる現象のことをいうのです。このように、学習には、知識や技能を習得できるようになろうと努める段階と、その努力の結果できるようになった状態の2つの側面が含まれています。学校での学習をみてみますと、ほぼパターン化されており、教師があらかじめ正解のある発問やテストをして、それに児童や生徒が解答する。そして教師は、教えたことを彼らがどれだけ覚えたか評価するのです。このように、学校は先生から知識を伝授される場所という受動的な学習観が支配的であるために、習ったことを忠実に再現できるかどうかという学習の成果、つまり結果としての学習を問われることになるのです。結果主義、効率主義、つまり「できる」という論理に支配されているために、学びの「過程」がおろそかにされ、学ぶことを楽しむゆとりがなくなっているのが現状です。その結果、「学び」は味気ないものとなり、自ら学ぼうとしない無気力的な人間が増えてきたのではないのでしょうか。真の「学び」とは、知識を覚える作業（暗記）であるとか、どうすれば効率的にうまくいくかというやり方だけを覚えようとすることではありません。また、学校での学習の影響によって、教える人がいないと学べないという学習観が暗黙のうちに形成されているように思われまます。

すべての学習者にとって、学校で学んだ知識は将来の生活において普遍的に評価をもつのでしょうか。学校で教えられる知識は、生活状況から切り離され一般化された知識として与えられます。

これは、今身につけておくと将来どのような職業についても役に立つだろうという親心からかどうか分かりませんが、実際には必ずしも役に立つかどうか分からない知識が多いのではないのでしょうか。本来、人間の学習は、学校のなかだけで行われるものではなく、文化的・社会的な文脈のなかで展開されていることはまぎれもない事実です。しかも「学び」には、一人ひとりにとってもっと固有な意味をもつ経験が伴うはずで、そして、一人ひとりの知識が再構成されていくのです。しかし、学校における学びには、日常生活の「文脈」の中での学びが切り離され喪失されてきたのです。一方、日常生活においては、人はさまざまな活動や遊びを通して、知らず知らずのうちに多くの必要な知識や技能を学んでいることに気づきます。たとえば、幼児は自発的に言葉を話し始めたかと思うと、瞬く間に日常生活に必要な言語を操ようになります。また、生活上の必要から食事づくりに取り組む場合などもそうです。はじめは料理の本を頼りにぎこちなさが見られたのに、そのうち手持ちの材料を使ってすばやく臨機応変にアレンジできるようになります。日常生活においては、必要とされる知識や技能を、外からの強制がなくても、それほど難しいと感じなく身につけてしまうのです。面白いことに、そこには、相手とコミュニケーションしたいとか、おいしいものを食べたいという気持ちが前面にあり、学校の勉強のようにことさら学ぶことそのものを目標としてがんばるという意識はありません。いつのまにか学習が成立していたというのが実状でしょう。このように日常生活での学習のように現実的必要性から学ぶ場合には、教える人がいなくても知識を学び、技能に習熟するのです。

近年、生活状況の中に埋め込まれた学習に関する研究が報告されてきました。サックス（1988）は、学校でしか学べないと思われる高度な知識や技能でも、日常生活の中で学ぶことができる事例を報告しています。ブラジルのキャンディー売りの子どもの多くは、ほとんど学校に行っていないのですが、キャンディー売りの経験を通して高度な算数を身につけているのです。子どもたちは自分で卸売り店に行ってキャンデーを購入手、小売り値をつけて売ります。当時のブラジルはインフレが激しく、生計を立てていくためには損をしないように毎日のように値段を調整しなければならなかったのです。3本1組で500クルゼーロで売ると、7本1組で1000クルゼーロで売ったときでは、どちらが得かを考えなければならないのです。誰が教えてくれたかと尋ねても、彼らは「誰も教えてくれないよ。自分で覚えたのさ」と答えたそうです。キャンディー売りの経験のある子どもとない子どもに前述したような比率の問題を与えたところ、キャンディー売りの子どもたちの成績が格段に優れていたのです。学校で先生に教えてもらったわけでは決してなく、自らの経験を通して学んだものなのです。人は本来的に能動的な学び手であって、学校での勉強のようにテストや賞罰によって強制されなければ学ぼうとしないどころか、日常生活のなかでは、教える人がいなくても現実の必要性からすすんで学ぼうとする存在なのです。

レイプら（1991）は、スーパーマーケットの買い物客の購買行動の研究をしています。スーパーマーケットでは、毎日のように商品を何個か入りのパッケージにしてお徳用セールをしています。

例えば、2冊1組で500円のノートと5冊1組で1000円ではどちらが得かというような場合に、頭の中で複雑な計算をするのではなく、即座に徳用のパックを選択します。その時、買い物客に、「なぜそっちを取るのか」と聞くのです。学校で習うような単位量あたりの値段に換算して比べるのではなく、見事な概算の仕方です。ところが、この買い物客の計算能力テストを調べたところ半分も正解できないぐらいなのです。私たちの中にも、抽象的な数字の計算練習などを学校でしっかり勉強してないと実生活のなかで困る、という信仰に近い考え方がありますが、この研究は、それを根底からくつがえすものなのです。私たちもわざわざ電卓で計算したり、紙と鉛筆を持ち出して単位量あたりの比較はしませんよね。スーパーマーケットでの計算の仕方は、学校で教わったやり方でもなく、両者に共通性はあまりないのです。

ベナー（1984）は、看護婦が看護技能を習熟していく過程を分析して、初心者から達人までの5段階に分けています。初心者は測定値に従ってマニュアル通りにふるまうだけの段階であり、新人では、全体の文脈の流れが見えるようになります。一人前になると、大切なことを瞬時に判断して全体との相互関連の中で対応策が立てられるようになります。さらに中堅になると、全体の流れを見渡せてほとんどのことが意識しなくてもできるようになります。最終的に達人の境地に達すると、直感がとぎすまされてきます。この習熟過程から分かることは、学校で覚えた知識は実際の文脈から抽象化されているために、初心者段階の看護婦のように、頭で覚えただけの知識ではさまざまな状況に柔軟に即応できないといえます。

今まで述べた例からわかりますように、学習によって得られる知識は、状況に埋め込まれているのです。「状況に埋め込まれた知識」は、具体的な状況において個別に実践する中で獲得されるものなのであって、文脈から切り離して覚え込まれた知識は実は役に立たないのです。本当に「学ぶこと」とは、このようなことなのです。

ところで、私たちの文化の中での教育を考えてみますと、「学ぶこと」は「教えること」と切り離して考えることはできません。このことについて、原ひろ子（1989）の文化人類学のフィールド研究からの興味深い事例報告があります。それは、カナダ北部の北極圏に居住し、ウサギ（hare）に強く依存した生活をしているヘヤー・インディアンの社会でのエピソードです。彼女が、越冬のことを考えて夏に「かんじきの歩き方を覚えたい」と言うと、老人たちが「雪もないのにかんじきなど」と爆笑。そこで、通りがかりの子に再び尋ねると、「そんなことは人に教えてもらうものではないわよ。冬がきて、雪が降って、自分ではいってみればわかるわよ。そして歩くのよ」と相手にしてくれない。ヘヤー・インディアンの文化には、「教える」とか「教えてもらう」という概念がないので、「だれから習ったの?」とか「だれから教えてもらったの?」と聞いても、彼らは「自分で覚えた」としか答えられないのです。まず自分でじっくり観察し、やってみて、自分で修正するのです。この例から、「学ぼう」とする行動は人類に普遍的なものであることがわかります。ところ

が、「教えよう」「教えられよう」という行動は文化に特有なものであり、普遍的なものではないのです。

学校における学習では、先生が「教えよう」という意識を強く出しすぎるために、子どもたちに「教えられよう」という受動的な態度が無意識に植えつけられ、子どもたちの「学ぼう」とする意欲や行動が抑えられているのではないのでしょうか。塾は、まさに問題の解き方のテクニックを教え込み、テストでよい点をとらせようとしています。高度な文化をもつ社会では「教える－教えられる」という教育の営みを全く取り除くことはできませんが、もっと自分のペースで興味・関心のあることを追求していく時間が必要なのではないのでしょうか。小さいうちから自ら学ぶ喜びを体験させることは重要なことなのです。大人は、子どもの気持ちにおかまいなく、つつい先回りして手をさしのべすぎてしまうのですが、できるまで気長に待ってやるゆとりをもつことが大事なのではないのでしょうか。間違ったことによって、かえって認識が深まることも多いのです。人間は、本来怠け者ではなく、誰もが能動的でかつ有能であるのです。退職後の70・80歳の老人が積極的にカルチャー・センターに通い、本当の学びを経験している姿を見かけます。そこでは、青年期まで過ごした学校とは異なり、落ちこぼれなどのレッテルを貼られることもなく、生き生きと楽しく学んでいるのです。人から「勉強しろ、勉強しろ」と口癖のように言われると、かえって学びたくなくなる経験をした方が多いだろうと思います。それは、自分が行動の主体なのに、人からコントロールされるような気持ちにさせられるからなのです。

これまでの教育には、学校で習ったことを実生活に適用するという暗黙の方向性がありました。ところが、日常生活の中で必要性を感じ、実際に体験することによって真の学習が成立し喜びが生まれるのです。例えば、子どもたちは、文字を習ったから書くようになるというよりも、自分の名前を書きたいから文字を学ぼうとするのです。近年、従来のやり方を逆転させた試みが注目されてきました。その一つが、フランスのセレストン・フレネが創始したフレネ教育です。伝統的な学校教育ではすっかりやる気をなくしていた子どもたちが、能動的な学びの主体になり、目を輝かせていくのです。学び手の能動性と有能さを支えるものは、知的好奇心なのです。わかるとそのこと自体が楽しいのです。さらに理解しようとするのです。このような学びの経験が、さらに学習を展開し、新しい創造につながっていきます。それが、将来、適応していくうえで役に立つのです。

生涯学習という長いスパンでとらえてみますと、人が学校で学ぶのは、一生で学ぶことのごく一部にすぎません。人は、他の動物に比べて、生まれつき組み込まれた行動で環境に適応することがきわめて少なく、しかも、ほぼ生涯にわたってすぐれた学習能力をもち続ける特徴があります。一生涯学び続けていく存在といえるのです。世界自体が目まぐるしく変化していく以上、過去の経験を蓄積するだけでは十分でなく、日々新しい情報を取り入れることによって知識の修正や再構成をしなければなりません。まして、日常世界においては、すぐには答えの出ない問題や現代社会が抱える諸問題が山ほどあります。学校での学習のように、社会の文脈から切り離され、抽象化さ

れた知識や技能だけでは、とうてい対応しきれません。人生において遭遇する問題のほとんどは、答えが一つということはないのです。むしろ、いくつもの答えが可能であり、どれが正しいのか分からないことの方が多いのです。将来役に立つのは、覚えた知識の量では決してなく、自分自身で計画を立て、自ら工夫しながら学ぼうとする自己学習の力なのです。つまり、人間にとっての「学び」は、生きていくために不可欠なものなのです。人はいかに学ぶのかということについて、日常生活における学びの観点から学校教育での学びを再考してみますと、学校は極めて能動性、柔軟性、創造性に乏しい隔った学習の形態をとっていることが分かります。真に学ぶ力は生きる力になるのです。人間にとって学ぶことは生きているかぎり続くものであるということを、もう一度かみしめてみる必要がありそうです。

(本学初等教育学科教授・運営委員)

参考文献

原ひろこ 1989 ヘア・インディアンとその世界 平凡社

稲垣佳世子・波多野諠余夫 1989 人はいかに学ぶか 中央公論社

レイヴ, J&ウェンガー, E 佐伯・福島真人(訳) 1993 状況に埋め込まれた学習—正統的の周
辺参加 産業図書

佐伯・藤田英典・佐藤学(編) 1995 学びへの誘い(シリーズ学びと文化1) 東京大学出版会